ろう学校の仲間

平成八年度　三年女児

「はじめまして、鈴木真弓です。」
こう言おうとしていたのに、はずかしくて言えませんでした。でも、にっこりとわらったら、女の子がわらい返してくれました。わたしは心が通じた気がして、とてもうれしくなりました。

裕太君は、ろう学校の三年生です。ときどき苦浜に来ていっしょに勉強しています。いつもは裕太君が来るだけなので、今度はわたしたちが裕太君の学校に行ってみよう、そして裕太君の友だちともなかよくなろう、ということになりました。

ろう学校に着いて、まず、わたしたちは校しゃを見学しました。図書室にはパソコンがありました。息を長くのばすくんれんに使うのだそうです。
「アー。」と声を出すとカニや車が動くしくみになっていました。わたしたちはおもしろがって使っていたけれど、裕太君たちにとっては大切な勉強道具の一つです。

わたしは、大切な勉強道具をおもちゃみたいに使って悪かったな、という気持ちになりました。そして、長くつづけて声を出すのはきっとくるしいだろうなあ、と思いました。ほかにもいろいろな教室を見て回りました。特に心にのこったのは、三年生の教室です。小さなへやに、つくえがたった五つしかありません。おく山先生は、
「これでも三年生の人数は、多い方なんだよ。」と教えてくださいました。わたしは、他の学年の人はもっと少ないのか、とびっくりしました。でも、ろう学校では、小さい子どもから中学生までいっしょに勉強していいます。わたしは、たくさんのお兄さんやお姉さん、弟や妹がいるようでいいなあ、うらやましいなあ、と思いました。わたしは、ろう学校のことがもっともっと知りたくて、
「『あ』と『は』は、口の開け方が同じなのに、どうしてわかるんですか。」としつ問しました。すると、
「『あ』は息がでません。けれど『は』は息が出ます。そういう所でくべつをしているんですよ。」と、おく山

先生はやさしく教えてくださいました。それでもわたしは、本当にわかるのかな、とふしぎでした。

　次に、みんなでドッヂボールをしました。ほちょうきをしている耳に当たらないように、わたしは少し手かげんしようかな、と思っていました。でも、そんな心配はまったくいりませんでした。裕太君たちはとてもすばしっこくて、なかなかボールが当たりません。わたしはとうとう一人も当てることができませんでした。

　さいごにプレゼントを交かんしました。裕太君たちは手作りのかべかけをくれました。わたしたちは手作りのキーホルダーをあげました。わたしは、キーホルダーを気に入ってくれるかな、と心配でした。でも、みんながとてもよろこんでくれたので、よかったなあ、と思いました。

　お別れする時、一人一人とあく手をしました。えりさんの手をにぎった時、えりさんはわたしの手をぎゅっとにぎってくれました。えりさんの手はとてもあたたかくて「また来てね」と言っているような気がしました。わたしも「また来るね」という気持ちでぎゅっとにぎり返しました。

　いよいよバスにのる時、とてもさみしい気持ちになりました。バスのまどから見ると、裕太君たちは一生けんめい手をふってくれていました。わたしも一生けんめい手をふりました。バスが動き出しました。わたしは、まどから体をのり出して手をふりました。裕太君たちは、バスをおいかけて走ってきました。校門の外まで出てきて手をふってくれました。わたしも、手がいたくなるくらい大きく手をふりました。ろう学校が見えなくなると、楽しく遊んだことが　つぎつぎと心にうかんできました。

　ほんの少しの時間でしたが、とても心にのこりました。また、ろう学校に行ってみんなと遊びたいなあ、そして、ろう学校のみんなも、わたしたちの学校に来てくれたらもっといいな、と思いました。